

L. パラートの『身体と芸術』とF. ヒルカーの
『身体教育の新しい課題』について
— 『芸術的な身体修練』より—
菅井 京子¹⁾

“Körper und Kunst” von L. Pallat und
“Neue Aufgaben der Körpererziehung” von F. Hilker

Kyoko SUGAI

Zusammenfassung:

Anfang des 20. Jahrhunderts entstand in Europa mit Deutschland als Zentrum die sogenannte Gymnastikbewegung. Es entwickelten sich schnell viele verschiedene Schulen. Seitdem wurde über die neue Gymnastik intensiv geforscht. Mit der Forschung hat die Gymnastik sich nach allen Richtungen entfaltet. Die Gymnastikbewegung kann als der Ausgangspunkt der heutigen Gymnastik angesehen werden. An der “Tagung für künstlerische Körperschulung”, die L. Pallat und F. Hilker im Jahr 1922 in Berlin veranstaltet haben, nahmen viele Vertreter von diesen gymnastischen Schulen teil. Die Tagung gab ihnen eine Gelegenheit für die Zusammenarbeit und der Gymnastikbewegung einen großen Anstoß. Auch in Japan wurde schon in den 30er Jahren vieles über diese Tätigkeiten von den gymnastischen Schulen in einigen Büchern, z. B. “Der Weg zu neuer Gymnastik” von B. Ootani, publiziert. Aber in diesen Büchern gab es nur wenige Beschreibungen über diese Zusammenarbeit.

Der Zweck der Forschung ist es, eine Hilfe zum Nachdenken über die heutige Gymnastik zu geben. Als Beitrag dazu soll diese Übersetzung der Abschnitte “Vorwort” und “Körper und Kunst” von L. Pallat sowie “Neue Aufgaben der Körpererziehung” von F. Hilker aus der Publikation “Künstlerische Körperschulung”, die im Jahr 1926 als dritte, erweiterte Auflage von L. Pallat und F. Hilker herausgegeben wurde, dienen.

Schlüsselwörter : Gymnastikbewegung, neue Gymnastik, heutige Gymnastik

1) 生涯スポーツ学科

訳者はしがき

20世紀の初め頃、ドイツを中心にヨーロッパでは体操改革運動 (Gymnastikbewegung) が起こった。この運動には、新しい体操諸派の多くの多彩な活動が含まれている。その後、盛んに新しい体操の研究が進められ、体操はいろいろな方向へ大きな発展を遂げてきた。この体操改革運動が、現代の体操の原点であると考えられる。1922年にベルリンで行われた「芸術的身体修練のための会議」には、この新しい体操の代表者たちが参加した。L. パラート (Ludwig Pallat, 1867-1946) と F. ヒルカー (Franz Hilker, 1881-1969) 等の呼びかけによって実現したものである。これは、新しい体操の諸派に共同研究のための最初の切っ掛けを与え、体操改革運動を大きく推進したと考えられる。すでに30年代に我が国でも、大谷武一著の『新しい体操への道』(1930) 等の中で、それら新しい体操諸派の活動については紹介がなされている。しかし、この諸派が連携して共同するような活動についての記述はあまり多くはない。^{注1)}

本研究では、現代の体操をよりよく理解するための手掛かりを得るために、この「芸術的身体修練のための会議」の報告書である『芸術的身体教育』(第3版、1926年)^{注2)}から、その序文、目次、L. パラート^{注3)}の論文『身体と芸術』、およびF. ヒルカー^{注4)}の論文『身体教育の新しい課題』の翻訳を試みた。同時に、ヒルカーの『身体教育の新しい課題』を理解するための補助として、当時の彼の論文『ツルネンと体操』の翻訳も加えた。^{注5)}

芸術的な身体修練

初版と第2版への序文

「芸術的身体修練のための会議」は、1922年10月5日から7日まで、ベルリンで行われた。これは、教育と授業のための中央研究所が、確乎とした学校改革者たちの連盟、ドイツ帝国体育委員会やスポーツ・身体養護のた

めの中央委員会と関係をとって、催したものである。そこでは、有名な身体養成所の授業活動が次々と具体的に提示された。それらの養成所は、今世紀の初めからドイツで発展を遂げてきたものであった。また、集会は、いくつかの講演を通して、芸術的身体形成の理論的基礎について熟考するための切っ掛けを与えた。多数の出席者や熱狂的な観客が一同となって、演技発表に付いて回った。それは、これらの人々にとって、特に若い人たちにとって、芸術的身体修練の本質と価値について明らかにするという欲求がどんなに強いかを示していた。しかし、この集会だけでは、このような欲求を満足させるには十分でなかった。この集会がもたらしたものはあまりにも豊かで、多種多様であったし、それを十分に理解するには時間が短すぎた。それゆえ、すでに催しの間から、この集会の内容を報告書にまとめ記録してほしいという要望が多方面から出された。私たちは、このような要望に添うことによって、同時にこの集会に参加できなかった人々の役にも立てるということを期待する。そのために、この集会の直接的な印象と意見交換を通して得ることができたことも記録に残した。私たちは、単なる報告だけに止まることなく、集会で行われた講演を補足し、深める努力をした。それが、この領域のさらなる発展のための基礎を作ると信じている。私たちはルートヴィヒ・クラゲス博士とベス・M. メンゼンディーク女史に感謝している。彼らは、寄稿によってこの本の価値を一段と高くすることに貢献してくださった。また、出版者にも感謝している。彼によって、私たちは自分たちが強く結びつけられたと感じている。また、この難しい時勢にもかかわらず、写真を伴う豊かな装丁、この出版物の芸術的内容に相応しい装いを整えるために、彼は力の限りを尽くしてくださった。

1923年3月、ベルリンにて
ルートヴィヒ・パラート／フランツ・ヒルカー

改訂増補第3版への序文

『芸術的身体修練』はその刊行以来、専門家や一般の体操愛好家たちの間で評判になった。1924年のクリスマスにはすでに第2版の出版が求められた。これは初版と同じものであった。第2版の出版と同時に、私たちは第3版のために準備を始めた。文章の補充と新しい写真の提供であった。1922年の集会はドイツの体操改革運動に大きな推進力を与えた。その後の3年間に、多くの新しい試みがなされ、成果をあげてきた。とりわけ、体操連盟の設立は、ひとつの大きな出来事であった。集会当時は互いにまだ全く何の関係もなく活動していた大きな体操の諸派が1925年11月1日に「ドイツ体操連盟」を設立し、強力な統合を果たした。この新しい出版物では、これらの事実が考慮されなければならなかった。そして、この『芸術的身体修練』の第3版が、大きく増補されて刊行されることになった。これによって、会議報告書の枠を破ることになったとしても、1922年10月の会議に参加しなかった人々には、新しい体操の方向性や体系としての入り口を見出す手助けになるであろう。しかし、体操体系や形成的な身体修練の主要問題についてひとつのまとまった叙述をするという、この本の基本構想は変えられずに維持された。

この『芸術的身体修練』は、編集者たちによる序文の他、3群の論文を含んでいる。第1群には、体操諸派の演技内容が、第2群には、身体教育の一般の問題についての理論的研究が、第3群には、実際の青少年の身体教育の場における、教育学的、衛生学的、あるいは芸術的な新しい取組が収録されている。第1群は、前の版に較べて、若干の重要な補充がなされた。メンゼンディーク体操の領域からのふたつの論文に、「応用的で自由な運動のための連盟」での研究の拡充についての短い説明が加わった。今日、ドイツでは、バス・メンゼンディークによって代表される厳しいメンゼンディーク体操の方向と並んで、

ふたつのドイツ的なその応用体操が成立している。ルードルフ・ボーデ博士は、一般的教育内容の彼の寄稿を、彼の表現体操の根本的特質の叙述に差し換えた。ルードルフ・フォン・ラバンは、マルガレーテ・シュミットによって書かれたラバンの運動学についての短い導入的な解説に代えて、アマチュア運動合唱団の創造についての彼の着想の詳しい解説を提示した。ヴィル・ゲーツは、芸術的身体修練をマリー・ヴィクマン学校の体操の研究の写真によって補足する。この本の第2群は、初版と変わっていない。それに対して、第3群の教育学的な寄稿は、全面的に書き直された。「子どもの身体」というテーマで書かれていたマックス・テップの一般教育学的詳論は、適切に「体操と教育」と改題された。さらに、5つの新しい論文が寄稿された。ゲルトルト・ハマーが、青少年の身体教育の草案を書き、ヒルデ・ブラッハフォーゲルは、ルール地方の身体的に蝕まれた子どもたちに対してのダンカン学校の研究についての興味深い報告を提示し、マリー・ゼルブマン・シュラフホルストは、彼女はローテンブルクのクララ・シュラフホルストやヘートヴィヒ・アンデルセンの同僚であるのだが、長年の子どもに対する実践の経験に基づいて「呼吸のリズムから生まれる形成的な力の発達」を叙述した。ゲルト・フィケンチャーは、「実践的体操の根本的な問題」をテーマに、クリスチャン・ヘルマンは、「純粋な形態への教育」において教育学的議論を作業的なものから芸術的なものへと立ち戻らせた。これらの論文が加わって、1922年の集会に由来するルゼルケとブラシェの初版からの身体教育の芸術的形態についての論文の主旨が援護されることになった。文献一覧や写真資料、特にメンゼンディーク体操の図式的な説明がイラストから写真に差し換えられたことや、大きな活字の採用も読者たちに喜ばれるであろう。

新しくなったこの本が、体操改革運動の健

全な発展のために、愛好家や後援者たちの支持を得て、体操の仲間の輪をさらに広げていくことができるようにと願う。

1925年クリスマスに、ベルリンにて
ルートヴィヒ・パラート／フランツ・ヒルカー

目次

枢密院上級参事官ルートヴィヒ・パラート
(ベルリン)の『身体と芸術』…9

高等学校官フランツ・ヒルカー (ベルリン)
の『身体教育の新しい課題』…13

校長マックス・メルツ (チロルのギンゲン)
の『エリザベート・ダンカン学校』…19

エルンスト・フェラント・フロイント (ウィー
ンのシュロス・ラクセンブルク)の『リズム
、音楽そして身体形成のためのヘレラウ
校』…31

ベス・M. メンゼンディーク (ニューヨーク)
の『我が体系』…41

ハートヴィヒ・ハーゲマン (ハンブルク)の
『身体文化』…45

ドロテー・ギンター (ミュンヘン)の『応
用的で自由な運動のための連盟』…52

L. ランガート (フルダのディアロース)の
『ローエラント』…54

ルードルフ・ボーデ (ミュンヘン)の『表現
体操の本質について』…61

ルードルフ・フォン・ラバン (ハンブルク)
の『ダンス体操』…77

ヴィル・ゲーツ (ドレスデン)の『マリー・
ヴィクマン学校』…96

フランツ・キルヒベルク (ベルリン)の『生
理学と芸術的身体修練』…102

クララ・シュラフホルスト (フルダのローテ
ンブルク)の『呼吸の重要性』…116

監督官パウル・ベッカー (カッスル)の『音
楽と芸術的身体修練』…128

ルートヴィヒ・クラークス (チューリヒのキ
ルヒベルク)の『リズムの本質について』
…148

マックス・テップ (ブエノス・アイレス)の

『体操と教育』…192

ゲルトルート・ハマー (ベルリン)の『青少
年の身体教育』…199

ヒルデ・ブラッハフォーゲル (チロルのセン
ト・ギルゲン)の『エリザベート・ダンカ
ン学校の子ども支援』…207

マリー・ゼルプマン・シュラフホルスト (フ
ルダのローテンブルク)の『呼吸のリズム
からの形成的な力の発達』…211

ゲルト・フィケンチャー (ミュンヘン)の『実
践的体操の根本的な問題』…217

クリスチャン・ヘルマン (ベルリン)の『純
粋な形態への教育』…232

マルチン・ルゼルケ (ユイスト)の『運動劇
と学校の舞台』…236

ユリウス・ブラシェ (ハンブルク)の『乾燥
高地のダンスサークルの多彩なダンス』…
252

文献一覧…255

身体と芸術

若く、自由であること、それは限
りあるもの！形態だけでなく、すべ
てのこと、しかし、形態だけが私た
ちを自由にする。

そこからこの本が生まれたその集会は、
「芸術的身体修練」と呼ばれた。この名前が
妥当であるのかどうか、その集会の参加者た
ちも少なからず疑念を抱いていたし、また、
この本の多くの読者たちも疑問に思うかもし
れない。それにもかかわらず、私たちは、一
度選び取られたこの名前に固執するべきであ
ると信じている。なぜならば、それによって
この集会とこの本との間の関係が保持される
ばかりでなく、身体修練の問題をただ体育の
領域の中でのみ捉えるのではなく、現在進行
中の芸術的な運動とも照らし合わせるとい
う視点をもつということが重要であると考え
るからである。この試みの成果が名称の正当性
を立証するであろう。そして、その成果を、

私たちは、青少年の身体形成に対して責任のあるような組織が、真剣にその活動が現代の芸術的な努力に合致させられうるか、またどのようなという問題に従事し始めたということの中に見出すことができる。この努力が向けられた授業領域の例が、学校改革のために役立っている。

図画、工作、綴り方、歌唱そして体育は、学校では「技術の学科」と呼ばれ、少なくともより高等な学校では、いわゆる学問的な学科よりも低く評価される。このような低い評価を考慮すると、前世紀末以来まさにこの「技術的学科」が授業管理官庁による多くの努力と費用の投入によって促進され、かつて追求されたものとは大きく相違するような道へと導かれてきたということは、奇妙に思われる。そもそも、ものすごい技術のよく訓練された力を供給するために、あるいは、技術的能力、手や声や身体のコントロールを高めるために、これらの授業が始められたのだろうか？体育においては、このような問がすぐさま肯定される。しかし、その他の領域では、最近の10年の間にその領域が育んできた発展が、純粋な技術的なものを大きく越えて現れてきている。図画では、1898年に新しい運動が起こった。2・3年後、それは少年の工作に、1907年には少女の工作に、1910年には音楽に、そして1914年には綴り方に及んだ。このような領域においては、技術的能力の取得を、もはや決して唯一の、あるいは主要な課題と見なしてはいない。今では、模造することを学ぶためにではなく、心で感じたものをクレヨンや絵の具で表現するために描くのであり、鋸で挽くあるいは縫うことを学ぶために鋸あるいは針で仕事をするのではなく、自分自身の造形感覚から形作るためにするのであり、標準的な文章をマスターするためにではなく、伝統的な文章の形式とリズムで、書くことの自然なリズムのもつ力を発揮させるために書くのであり、メロディーを練習して覚えるためにではなく、音楽的な感覚

や表現能力を発達させるために歌うのである。それ自体の自己目的より優先された図画・工作の技術的なことを、内的な体験のための表現手段にする努力があらゆるところでなされた。まず図画において、このような意図が明瞭になったとき、学校と芸術の間の対立が特に目に付くようになった。本来は技術的なものとしてではなく、芸術科目として学校へ導入された図画の授業は、前世紀の流れの中で、科学性を追求し、ただ技術的熟練や正確さを目指すような方法において硬直化した。まず芸術家や芸術愛好家たちが、授業のこのような拘束から子どもたちを解放することが、至急の課題であることに気づいた。学校自体も次第に従来の授業法では子どもたちを向上させるよりは、むしろ子どもたちの成長を妨げるということを理解し始めた。そこに、主として心理学からの後押しが起こった。子どもの心について研究された成果が、授業の新しい方法のために取り入れられるようになった。そして「芸術家としての子ども」あるいは「子どもの生活における芸術」というようなスローガンとともに進められた子どもの自然な強制されない表現法は、芸術家の創作のときと本質的に同じような活気を示すということがわかった。それゆえ、子どもの心に、それ相応の権利を獲得させることは、私たちが目指して進んできたことの最終目標である。そして、図画の授業において、初めて芸術への道が子どもの心への道として歩まれた。その指導を独創的な芸術家たちが引き受けた。次に、工作と綴り方の授業が同じ方向で同じように発展した。歌唱や音楽の授業においてもすでにしばらく前から、子どもの積極的な創造的な参加がひとつの重要な教育要素になっていた。完全に脇に置かれたままで今に至っているのが体育であった。

体育をも芸術的な運動の仲間に加えようとする最初の試みは、1905年にハンブルクで音楽と体操をテーマとして行われた第3回芸術教育会議でなされた。しかし、それは不首尾

に終わった。失敗せざるをえなかった。それは、会議の主催者たち自身によって選ばれた課題の本質について必要な認識が彼らに欠けていたからではなく、彼らが重要なものとして指し示すことのできた実例があまりに少なすぎたからであった。イサドラ・ダンカンがドイツに現れ、彼女の姉エリザベート・ダンカン——彼女は後にひとりでその学校を率いることになるのだが——とともに、創立した学校がまだ最初の活動を始めたばかりであった。また、ジャック・ダルクローズは当時まだドイツでは全く知られていなかった。彼自身、音楽的なリズムのための感覚は身体の基本的な運動によってのみ発達させられると初めて気付くのは1904年になってからのことであった。おそらく当時は、残念ながら、リトミックの動きの本質について語るようなことができるような啓蒙的な芸術家を育てるといったようなことに誰も思い及ばなかった。そして、その会議は、その前のふたつの芸術教育会議とは対照的に、少なくとも体操の領域にとって、また芸術の領域にとっても、全くの徒労に終わった。

その後、ただダンカン派とダルクローズ派だけが力強く発展したのでなく、一部は純粋に体操の、一部は芸術的な目標へ向かう新しい流派も加わって、戦争にも全く速度を弛められることなく成長していった。しかし、残念ながら、それら諸派の活動はひとつの総合的な運動には至らず、砕け散って多数の方法とその価値についての論争を引き起こした*。このような状況の中で、またひとつの課題が浮かびあがってきた。それは、まずワンダーフォーゲルの中で目覚めた新しい身体性への青年たちの憧憬を満足させられるようなものを、これらの体操諸派が共通にもっているかどうかという問題であった。このような問題を解決するために、いろいろな方法についての展望を与えるためだけでなく、あるいは学校授業の改革に資するものをそれらの中からひとつ見つけ出すためだけでなく、芸術的身

体修練の会議が催された。しかし、この集会では、課題を十分には解決できなかった。それは、それぞれの方法の代表者たちの理論的対立にもかかわらず、演技発表では相異点よりもむしろ共通点が提示されたことによるのではないと思われる。ひよとしたら、リズムの本質についてをテーマとする重要な講演が、講演者の病気のために取り止めにならざるをえなかつたことによつたのかもしれない。いずれにせよ、このような欠如はこの本によって補われる。集会の際の演技者による寄稿も少なからず集会での演技よりも明瞭にその趣旨について述べられている。従つて、この本は、演技の内容についてはただ写真によって暗示的に示しているにもかかわらず、それらを根本的に統一するものについては、おそらくこれが由来するその集会よりも、むしろ理解しやすいであろう。さらにまた、私たちは、抑制された心が自由になるような領域へと青少年の体育を導くために、それもまた応分の貢献をするということを願っている。

.....
*序文においてすでに言及したドイツ体操連盟e.V.の創設が、体操諸派のこのようなばらばらの状態を終わらせた。

身体教育の新しい課題

一面的に主知主義に偏つた教育、スピード重視のビジネス精神、そして殺伐とした産業組織は、残念ながらすでに国民社会のいろいろな領域で身体的健康を危うくしてきた。これは、まだ、戦争の食糧封鎖や戦後の栄養不良がドイツ国民を苦しめる前のことであった。そして、今日、私たちは身体的に劣等な体質を代々受け継ぎ、人類存亡の危機を目の当たりにしている。

しかし、人間の中の自然は本能的に生命の萎縮に対して抵抗する。世紀の変わり目頃、新しい身体性への意志が、若い人たちの中から爆発的に湧きあがった。大なり小なり人々の群れが大都会の壁を逃れて、生彩のない思

想に対する、教室の空気や家族の仕来りに対する治療薬を、自由な放浪生活の中に探し求めた。まず最初に、ロマン主義的な青年気分が国民社会に広がった。すぐに、それは私たちの生活に新しい美を与えるような大きな運動になった。そして、同じような時期に徒歩旅行運動とともにスポーツも私たち国民の身体的健康のための若返りの泉となった。そして、これらは片田舎の小さな村にまで浸透していった。運動遊戯や身体的技能や器用さの喜びが積極的に求められ、そして強い身体意志が、戦争や産業社会によって虚弱化された身体に精力的に抵抗した。丁度その頃、身体健康はすべての精神文化のために不可欠な基礎であるという認識も現れ始めた。それを目指して学校も身体教育により大きな重要性を認めるようになった。体育の授業は全く違った意味をもち——残念ながら、未だに日々の運動の促進はその実現を待たなければならないが——そして、教育手段としてだんだんと精神的な授業科目と並んで同等に歩んでいくことになった。

これは、始まりつつある身体ルネサンスの喜ばしい確かな兆候である。しかし、現代の身体的窮乏や国民の身体的・精神的健康のための体系的な身体修練の意義を認識する者は、始まりつつある改良のどのような兆しに際しても満足するべきではなく、健康で自然な生命を一般社会に回復するために何が必要なのか、最も基礎的なところから考えなければならない。

このような視点から、まず第一に、すべての民族同胞のための健康な存在条件を作り出すことが必要不可欠である。すなわち、産業と経済の社会組織、居住地や職場の空間、空気、光そして衛生教育や啓蒙、さらに医療的援助や総合的健康制度、公益の整備等々についてである。確かに、このような要求を満たすことは、今日大変難しくなっている。しかし、そうだとしても、都会の人口密度がどんどん上がっていくような現代におい

ては、それらの実現が国民の健康や国民文化のための前提必要条件である。国家は、国民のための国家でなければならない。

さらに、私たちに必要なことは、人間的価値や一般教育の課題のより深い理解である。今日、すべての人間の思考や行為は外的な目的によって決められている。私たちは、私たちの人間性すなわち私たちの身体的・心的・精神的力を一般社会のために発揮したり満たしたりするためではなく、職業、地位、名誉、金、権力や享楽を得るために生きている。外的な目標は、教育をも支配している。若い人たちは、職人、商人、学者、祖国防衛者や国民へと教育される。いつも、社会的目標、あるいは——より正確に言う——社会の目標としてよき古い世代が立てた目標が目の前に置かれている。そのような状況の中で、人間自身、固有の存在としての人間、固有の生命リズムと固有の精神をもった有機体としての人間が忘れられている。本当の教育では、人格の陶冶と社会的な適応の両方の目標が平等に視野に入れられ、常にそれらの対極的な緊張が保たなければならないのではないだろうか。このことは、身体修練のためにも重要であろう。すなわち、身体をいきいきとした躍動的な力で育成する、そしてそれと同時に、身体を合目的な技能のために準備させ鍛える。しかしながら、最大限の作業能力を求めるような場合には、自然な生命のための条件が決して傷つけられないように特に注意が払われなければならない。

このような見解に賛成する者は、私たちの通常の身体教育法がそれでは不十分であることを認めるにちがいない。ツルネンやスポーツの意義が見誤られている、あるいは見くびられているのである。したがって、この本では、また、どこにツルネンやスポーツの限界があるのかを明らかにすることについて手をこまぬいているわけにはいかないのである。

ツルネンは、筋力、柔軟性、勇気や規律を授ける。そして、それは集団行動や訓練の方

法として、最もよいものとされてきた。しかし、それは、器械運動を重視することによって、自然な身体感覚を抑えつけてもきた。その際の主眼は、常に、骨盤、腰部から体重を支えるのには全く関わらない肩あたりに置かれている。単独の筋群の酷使によって、リズムカルでない、すなわち不自然な呼吸で運動が実施される。とりわけ集団的なツルネンにおいて、それは技能や形態の美に対して全く無頓着に、何の生活上の必要性もなく行われる。さらに残念なことに、青少年のツルネンにおいては、学校に通例である他の学科のテストと同じように、しばしばテストとしてのツルネンが行われている。そこでは、号令や音楽に合わせた——後者の場合にはリズム体操と称して——ぎこちない美しくない運動、鉄棒や平行棒での強引な運動が行われる。汗をかきながら息切れした蒼白な顔、あるいは腫れあがり血管が浮き出て赤く鬱血した腕や引きつったように緊張した腱があるだけで、調和のある美しいリズムカルな運動の実施にはほど遠い状態である。しかし、ツルネンは私たちの学校からなくなるべきではない。ただ新しい改良が必要である。それには、何が人間の身体に力と形態を同時に授け、リズムカルな運動を可能にするのかについて感じ取ることができるより鋭敏な感覚が重要になる。

スポーツにおいては、確かに人間の自然な姿勢や運動が運動器械によって妨げられているようなことはない。しかし、この場合は、最も高い技能を求める考え方が健全な身体発達に対して危険な敵となる。不健康な体操選手やトレーニングしすぎたスポーツマンは想像以上に多い。特にスポーツ的教育は、身体修練の総合的な意味を台無しにすることもあり、青少年の年齢によっては健康を損なわせる危険にもなりうる。そもそも、最も高い技能は、常に追求されてよいのではない。記録の達成や短縮には、特定の身体部位の専門的な技能が結びついている。それに専念するこ

とは、身体にとっては有害なのである。リズムカルな身体陶冶の原理をスポーツにも浸透させ、力と最高技能の考え方を無害なものにしなければならない。身体のリズムカルで有機的な完璧さは、外的目標より高く、輝かしい成績や専門教育より高く評価されうるものである。しかし、現代的な時代の要求に応える身体教育の課題は、ツルネンやスポーツにリズムカルな感覚を行き渡らせることだけでは終わらない。私たちは、いきいきとした生活や運動、行為や造形に満たされた学校を必要としている。これらすべてがこれまでの学校には欠けていた。けれども、すでに、労働や生活のためのひとつの新しい修練が始められている。そこでは、運動や休憩、仕事における緊張や遊びにおける解緊、生活や学習、労働、身体修練、そして精神的陶冶が結びついて、いきいきとしたひとつのまとまりのある活動になる。とりわけ15歳から18歳までの職業学校の教育には、専門教育と一般的な人間教育、すなわち身体的・心的・精神的教育を統合するようなひとつの新しい授業編制が必要となる。いや、年齢を問わず、創造的な作業、精神的陶冶や体操的身体修練は、生活と密接に結びつけられて行われなければならない。

そして、最後に残る最も重要な仕事は、労働者を機械の奴隷状態から解放することである。機械を粉々にうち砕き、懐かしい手工業へと戻すことが重要なのではない。それは、世間知らずのロマン主義で、すでに私たちの時代の生活を考慮するとそれは不可能なことである。重要であるのは、機械の奴隷状態から脱して、機械の支配者になることである。ここに、また大きな課題が目の前に立ちはだかる。機械の絶え間ない作業過程を、緊張と解緊が交替する人間のリズムに合わせることは、手工業の道具の場合のように、人の作業能力と道具の空運転のリズムカルな流れをつくるようには、簡単ではない。しかし、この難しい問題は解かれなければならない。その

ためには、まず第一に、体操施設やスポーツ場を仕事場に併設することが必要である。職場体操や職業体操に加えて、労働者に一定の生産部門内で彼の担当の仕事在一定時間で区切って変えることを可能にするような組織的な対策も必要である。一度自分で工場の中に入って、実際に状況を見てほしいものだ。何百人もの労働者が同じ姿勢で何時間も機械の取っ手だけを操作する、あるいは常に細かな部分仕事だけを行っているのを見て、身震いするであろう。しかも、それは、伝動装置のぶんぶん飛び回る中で、天井の低い空間の埃や煤や油が充満した空気の中で、出来高払いの契約に疲労した神経を再三鞭打ち奮い立たせながら行われている。テイラーリズムの殺人的な作用に対抗して、一面的に酷使された生体の再生のために、もし仕事の交代や体操が導入されなければ、身体、心そして精神は惨めに死を迎えてしまうだろう。

このように、より大きなものの関わり合いの中から時代に合った身体教育の課題は生まれてくる。それゆえ、その細目や方法よりも、そこから行為が生じるような基本的態度がより重要であると思われる。もし、どうしても必要な合目的合理主義に出会ったときには、人間を忘れないこと！人間を生命ある者として、より内的な法則性から作用するリズムカルな存在と見なすこと！が、まず一番に大事である。そのような自由な——それだからまた「芸術的」とも言われる——身体修練の基礎と要素を見つけることが、この本の課題である。この本では、根本的なことについて明らかにされるだろう。リズムカルなことの本質について、よく言われたり、誤って扱われたり、誤って理解されているようなリズムカルな力の本質についても、また、体操の一般的な意味についても、明らかにされるだろう。ツルネンやスポーツ促進運動の多くの代表者たちは、体操は女性のためのものであると信じさせたいようであるが、体操は女性のためだけの要件ではないし、最近ツ

ルネンの本や発表会で誤って体操と言われている「ダンスツルネン」も全く体操とは関係がない。その他のことは、未解決のまま残り、ひっとしたら、そのうちのいくつかはもっと大きな問題になるかもしれない。しかし、もし対立や矛盾が隣り合わせに並ぶことになっても、それは決して悪いことではない。そして、それらの適切で満足のいく解決のために、さらに努力が重ねられるであろう。

長い間軽んじられてきた人間の身体は、他のものの横暴な拘束から脱して、昔ながらの美の中に復活する。そうして、身体は、生活の奴隷から解放され、生命の器になり、そこから生命が溢れ出る。引き裂かれ美しさの貧しい存在であった私たちは、満たされ、身体的な価値だけでなく、心的、精神的な価値をも担うことになる。

ツルネンと体操

ツルネンと体操の相互関係や両方の活動が青少年の身体教育に関わってもつべき分担は、最近の会議や専門誌での熱心な討論の対象である。体操の代表的人物たちは、確かにその都度、口頭で、文章で、身体教育のより新しい形態がツルネンやスポーツを排除するのではなく、合目的な方法でそれを基礎づけ、補うということを、強調してきた。しかし、相手側から、体操はしばしば歓迎されざるライバルとして見なされてきた。その教育的価値が疑わしいとして（プレーメンにおけるドイツ体操連盟《Turnerschaft》の決議）、また、最も厳しい場合は、それを撲滅せねばならない（デュッセルドルフにおけるプロイセン体育教師組合《Turnlehrerverein》の今年の総会へ出されたアルトネア（Altonaer）体育教師組合の公開書簡）などと非難された。もし体育においてのみツルネンと体操の関係が、さまざまな研究法の代表者たちによって議論されるのであれば、私たちも、そこで専門的な議論がもたらされるだろうことを

期待して、このような話し合いに参加する。しかし、その議論は、嘆かわしいことに、専門的理解のない熱狂的な中傷や批判になる。それよりも、より実り多く、快くあってしかるべきであるものを、いつもそのように終わるのである。

体操は、ツルネンやスポーツから区別され、それらに従属する、もしくは、上位に置かれる教材であるのか、また、体操の原理は他の研究法を活気づけ、新しくすることができるかもしれないような、ひとつの新しい身体づくりの原理であるのかという問いについて論じることを私は願っている。私は、体操を新しい教材とは思っていない。そうではなく、すでにあるものを受け継いだり、付け加えたりすることのできるような特別な運動群を、私は初めから強調している。なるほど、体操は、外面的に見てツルネンやスポーツと区画されうると言われたこともある。体操は、運動器具や最高記録を放棄することによってそれらと異なり、そして本来的に自然が与えた形態における身体に取り組む。その中に、人はたぶんある特定の運動財への制限を見て取るであろう。しかし、このような説明は外見上で言われたもので、ツルネンと体操の本質を正当に評価していない。ツルネンは、徒手体操 (Freiübungen) において、体操でと同じような身体自身によって行われる運動財をもつ。反対に、体操はどんな時も器械の使用を放棄する必要はない。スレーン (Surén) は、器械を用いる体操と用いない体操を識別している。また、エルザ・ギンドラー (Elsa Gindler) のところで、私たちは時々棒や他の軽い器具も用いて体操の授業を行ってきた。ある特定の運動財の群を前提とするような最大の力や最高記録は体操においてもまた追求に値する目標であるが、当然、それはツルネンやスポーツにおいてとは全く違う意味においてである。これについては後でもっと述べられるべきであろう。体操は、決して、ツルネンと区別されるような教材で

はない、あるいはそのような教材である必要はないということを、ここで、私たちは、ただ確認しておく。そもそも、人は、身体教育においてだけでなく、すべての教育において、過激な言い方であるかもしれないが、教材の横暴から、すなわち教材偏執病から離れることが試みられるべきである。

教育や陶冶においては、何が重要であるのか。それは、人間の成熟であり、調和の取れた円満完全な発達へ導くことであるはずである。これは、すべての生物がそうであるように、自然が与えた神秘的な内側からの力から出発して、そして取り囲む環境の力と対峙して生じる。人は後者に有効に影響を与えることができる。例えば、植物にできる限りその生長を促進する土壌の条件を整備するなど。しかし、もし、価値が専ら、あるいはとりわけ栄養の上に置かれるならば、なるほど大きくすること、もしくは美しい色を出すことはできるが、しかし、そこには、自然の被造物がもつ抵抗力や活動力から成る根元的な生命力が欠けている。温室の植物がそれにあたる。そしてまた、主眼を教材選択や教材充実に置くような教育についても、それは知識や学識に優れた種族を生み出すことはできるが、しかし、その種族には、根元的な、湧き出るような、創造力のある生命が欠けているのである。もっと正確に言うと、身体教育に適用された教材の強調は、技術を伝達し、成果を生み出すが、しかし、活力に溢れた生命の力については、身体を衰弱させるということの意味するであろう。

そして、たとえ体操が特別な教材の領域ではないとしても、体操は、新しい原理、新しい方向性を身体陶冶の仕事の中に持ち込むことによって、新しい研究形態としてのその正当性を証明しなければならない。ツルネンやスポーツの目標として、指導的で重要な人物たち (私は、ノイエンドルフとディームを挙げる) によって、再三、技能や成果 (Leistung) が挙げられてきた。それは、規

律、勇気、力、巧妙さ、速度の観点で、もしくは、物理的な尺度で個人を分類することにおいて、または、最善で詳細な方法によって、個人の特長な素質を細部まで鍛え抜くことにおいてである。もちろん、技能(Leistung)に際しては、身体は無視できない。しかし、それは、まず第二に置かれる。身体は、召使いとして、状況下で使い古されるような、あるいは酷使されるような、もしくは酷使されるような技能の手段と見なされる。むしろ、技能は重要であり、それなしでは社会生活や社会自体が成り立たないであろう。それゆえ、技能は教育的価値をもち、身体は技能の手段と見なされる。しかし、そのような社会が据えた価値と、人間自身の中に、身体自体の中に根ざしている価値とは相対している。身体の形成的な力や活力を育成するという身体教育の課題へ、体操はその関心を向ける。体操にとって、技能は、表だっではまず第二番目に重きを置かれる。身体教育の理想は、両方の原理の調和的な浸透の中にある。だから、体操と技能運動は、身体の子然の要求にも、社会の要求にも添うように、十分理解し合った協力において、共に作用する。ツルネンとスポーツは、技能を高める際に、体操によって仲介される身体機能の自然性や活気の価値を無視しないようにすべきであるし、体操は生命力を再び取り戻し、発達させる際には、社会の課題を達成するためにこのような力を役立てねばならない。

体操の本質は、身体を作り上げ、動かしている力をすべての抑制(障害)から解放するところにある。その抑制(障害)は、外的な目標設定、あるいは過度に高められた意図的な酷使がもたらすものである。自然へ帰ることが重要であるが、しかし、さらにまた、自然な生命機能が、それが最も純粋な、すなわち可能な限り有機的に作業することに向かうことが重要である。体操家の仕事は、身体の子骨格を合目的的に築き、規則正しく生命機能

を発揮させ、そして筋肉組織のリズミカルな緊張と解緊の交替に向けられる。緊張と解緊の交替の際には、個々の筋肉群の最大の力や持久力が問題なのではなく、全体の筋肉の共同作業が重要なのである。さらに、体操家の仕事は、身体の中で働く重力、求心力、バランスの身体的、感覚的力を再び呼び覚ますことに向けられ、繊細に感じ取られる運動経過に向けられる。そして、とりわけ呼吸や滞りのない血液循環、新陳代謝、神経系活動の内的事象に向けられる。体操学校は、それぞれの研究方法において、それを固定した運動の「システム」として硬直させるのではなく、方法の可能性を示し、人間の身体をいきいきと、心的、精神的生命の表現楽器にするために、問題の解決に努めている。例えば、ボーデが彼の研究において、主要な価値を振ることに置いたとき、彼は、それによって、それぞれの運動経過において、経済的な身体姿勢、最も繊細な身体感覚、筋肉群のリズミカルな運動、そして抑制されない内的な生命の活動を達成しようとする。その運動から感じ取られるのは、喜びと意欲の感情で、すべての年齢段階の人々や男性からも女性からもその価値が認められ、求められた。ツルネンとスポーツ、すべての技能運動においても、このような自然な形態の運動経過が重要である。エルザ・ギンドラー、彼女は抑制されない自然な呼吸のリズムの回復をその研究の土台にしているのであるが、彼女は、再三、それが人間の総合的な活動を活性化し形成すると言っている。ツルネンやスポーツにおける呼吸運動は随分昔から知られ、大きな成果とともに研究されてきたと言われている。ツルネンやスポーツにおける呼吸教育においても筋能力を高めることが強調される。それは、胸郭をできる限り広げ、あるいは肺をできる限りいっぱい空気を満たすことの中に現れる。エルザ・ギンドラーは、専門雑誌『体操』の5/6号の中の詳細な論文で、呼吸の際には、呼吸の強制されない自然な実施やすべて

の肺細胞における繊細なガス交換が、これまで通例の呼吸運動に特徴的に求められたような強制的に高められた酸素負債能力よりも、ずっと重要になると言っている。医学や体育科学の代表者たちは、たぶん、このような断定的な言い方には、異議を唱えるであろう。しかし、私はこのような立場で、次のことに言及し損じたくないと思う。それは、私たちが体育の学問というものを本来的にまだ全くもっていないということ、そして、医学がもし体育に関わり合うのであれば、医学がその科学的見解で、ツルネンやスポーツの実践的経験を裏打ちすることができるということである。新しい体操の研究がすでに紹介してきたような詳細な発見や経験は、たいてい未だ人々には知られていない。そして、古い流儀の体育について功績のある研究者や尊敬に値する後援者たちは、体操の研究法に何の理解もなく、相対している。それどころか、より新しい研究形態（解緊運動、呼吸教育）を軽んじ侮った態度で批判の矢面に立たせる。それに対して、医者たちは、しばらく前から、体操の研究をより真剣に見るようになり始め、そしてとりわけ実際に自分で体験しようと努力する動きが確認されるのは嬉しいことである。体操がその健康で自然な方法に基づいて、未だ現存する障害に対して成果を収めるであろうことを、私たちは確信している。もし、身体教育に関心をもつすべての人々が新しい研究法のよいところを認識し、青少年や国民の活動に役立てるように努力しようとするれば、彼らの健康促進にあたって、体操はさらに進歩し、その他の運動との協力も加速され高められるであろう。

最近、身体教育において生じているような事象は、陶冶の他の領域、図画・美術の授業では、すでに、確かな完結を見た。図画においても、少し前までは、技能がより大きな価値をもっていた。目が精鋭で、手が器用で、正確さと入念さの教育、表現することより「より正しい」と誤って思われていた遠近法

の立体的効果、あるいは寸分違わない現実描写が、授業の唯一の目標とされていた。しかし、その後、子どもらしい想像力や造形力の発達を第一の課題として、そのような出発点から当然生まれてくる結果としての技能に到達しようとするような、若い世代の教師たちが現れてきた。図画の授業において、長い間、大変激しく、荒れ狂った論争は、新しい運動に有利になるように、すでに決着済みであった。技能への教育が、それによって、何らかの被害を受けたということなしに、それは終結した。技能に向かう教育は、否定的な影響を受けるのとは反対に、より大きな自然性や喜びを授かることになった。私たちは、このような例から学ぶべきである。そして、身体教育において、起こり始めている発展のために、言い争いや悪意ある言動によって道を塞ぐ代わりに、仲の良い共同作業によって、障害になるものをできる限り取り除いていくべきである。体操家は、いつでも準備ができていた。他の身体教育法の代表者たちとともに、この課題に、時代に合った青少年の身体教育——ツルネンやスポーツや体操が重要なだけでなく、身体教育が重要なのであるから——に協同して取り組むことが肝要である。

記者あとがき

以上翻訳したように、L. パラートとF. ヒルカーは、改革教育的な視点から、当時の主知主義一辺倒な社会的傾向や、図画や体育において技術や高い出来映えを求める成果主義に反対し、身体的、心的、精神的にバランスのとれた体験を重要視して教育する立場を主張した。当時のツルネンやスポーツに対しても、運動が硬直し不自然であったり、最高の記録や技能を求めることに専念しすぎていると批判し、新しい体操を擁護し、体操改革運動を推進した。彼らは、当時ばらばらに活動していた新しい体操の諸派を「芸術的身体修練のための会議」を切っ掛けに、『芸術的身体

修練』の出版を通して、ひとつにまとめる努力をした。体操改革運動に与えた彼らの推進力は、高く評価されうるものである。

注

注1) 大谷武一(1930)新しい体操への道. 日黒書店:東京, では, pp.3-130.で, 新しい体操諸派の活動を紹介している。しかし, 諸派が共同するような活動については, ごく僅かしか記述されていない。例えば, pp.34-39.に, 「教育革新家仲間の個々の議論に続いて伯林の芸術的身体陶冶のための会議が催されたが, これは結局新運動のための宣伝で終始した。然るに, この会議にはどういふものか体操家及び競技仲間の参加が甚だ少なかった。斯ような状態であったから, 会議では, 自然, 新しいものは甚だしく古来の教育形式に対立し, 律動体操への立場を決定することが出来なかった。そこで, また一方ではこれに対する反対及び防御手段として, 独逸体操連盟(Deutsche Turnerschaft)では, 1925年ライプチヒで独逸女子体育会議を開催した。伝統的な体操家的意見の力はこの会議に於いてもなお甚だ強かったので, 自然, 新傾向との意見の交換は不可能であった。…体操の伝統の価値と力とを意識しつつ独逸では『独逸体操連盟は総ての健全なる時代現象及び改新努力にもとるものではない』とのテーゼが樹立された。これは同時に新体操諸派の拒絶を意味し, 諸流派によって鋭き宣戦布告と解せられた。斯くして1926年内的には一部分対立的な新体操諸流派が『独逸ギムナスティーク連盟』となって大同団結した。新体操諸流派の事業発展の状況を世間に紹介する目的を以て1926年デュッセルドルフで体操的身体陶冶会議が催された。会議では種々な諸流派の広範囲の方法形成と同時に, 材料の点に於いて全く根本的接近がなされた。就中, ボーデの振動及び表現運動, ラバンの跳躍及び運動合奏, メンゼンディーク体系の形成運動は諸流派の信頼を得た。独逸ギムナスティーク連盟は, 体操(ツルネン)及び競技(スポーツ)に対するその対立性を異なった方向を目指している目標を以て基礎づけ

ることによってのみ存在根拠を証明することが出来た。連盟では『身体を構造力及び生活力について育成し発達させ, 斯くして身体をば身体力のみならず, また心霊力, 精神力の保持者たらしめるような身体陶冶』を目指して進むことになった。この目標設置により新体操は新しい独立せる身体陶冶形式として体操(ツルネン)及び競技(スポーツ)と並立しようと努力している。』以上のように簡潔に述べられているが, 詳述は見当たらない。また, パラートについての記述は全く見つからず, ヒルカーについては, pp.37-38.に「諸流派の合同とともに『律動的』なる名称は取り去られた。何となれば, 律動的なる概念は, 余りに多義的な解釈を受け, 流派間の合一形式に際し, 分離的要素と認められたからである。ヒルケルは, この律動的の代わりに『純粹』と名づけている。』と, 数行だけである。同じように, 二宮文右衛門・今村嘉雄・大石峯雄(1933)体育の本質と表現体操. 日黒書店:東京, でも, 新しい体操の諸派については, pp.24-39.で, 紹介されているが, 諸派が共同するような活動については, p.31に, 「1925年是等流派の指導者代表, すなわちボーデ, ラーバン, ローエランド, カルマイエル, メンゼンディーク, ギンドラーが伯林に会し, 独逸体操G連盟を作った。現在この連盟にはあらゆる著名な流派が含まれている。この連盟の代表者は高等学校参与官ヒルカー-Hilkerである。』と数行しか見当たらない。パラートについてはこれも全く見つからず, ヒルカーについては, pp.42-45.に「ヒルカーは之にスローガンの形式を与えようとし『外的効果から転向して内的機能へ!』と述べている。…彼によれば『ツルネン及びスポーツは本質的に, 外部的な能力(行為)を目標としているが, ギムナスティークは内的能力, 呼吸, 姿勢及び運動等の喚起, 強化を目的としており, ツルネンの, スポーツ的, 職業的作業の前提(基礎)をなすのみならず, 更に身体を生命的表現の手段及び精神的価値の保持者たらしめるものである。』すなわち彼は暗々裡に体操とツルネン及びスポーツを対立関係においているのである。ヒルカーを主班とする独逸ギムナスティーク連盟も亦その定款三條に

『本連盟は体操の促進、普及、擁護、更には、身体をその構造力・生命力に基づいて育成し、発達せしめ、以て身体のみならず、心霊的、精神的なものの保持者たらしむるが如き身体陶冶を以てその目的とす、』と述べている。…『ドイツ体操連盟』の説明も『体操は身体陶冶に等しい』という事になる。」と体操連盟との関係で記述されているが、やはり僅かである。

注2) Pallat, L. / Hilker, F. (1926) *Künstlerische Körperschulung*. 3.erweiterte Aufl. Ferdinand Hirt :Breslau, pp. 3-18.

注3) ルートヴィヒ・パラート (Ludwig Pallat) は、1867年12月3日、オーバー・ハイムで生まれ、1946年11月22日にゲッティンゲンで亡くなった。彼はドイツの考古学者、教育家、そして省庁の公務員であった。彼は、1886年のヴァイスバーデンでの高校卒業試験を終えた後、ミュンヘン大学、ライプツィヒ大学、そしてベルリン大学で古典文献学と考古学を学んだ。1891年博士号を取得し、その年に上級教育職の国家試験に合格した。1892年から94年まで、彼は、ドイツ考古学研究所の奨学生としてギリシアやイタリアに留学した。1895年、彼はヴァイスバーデンにあるナッサウ古典古代博物館の所長に任命された。1898年にはプロイセンの文化省に招聘された。1915年から、彼は(公には兼務として)ベルリンの「教育と授業のための中央研究所」の初代所長を務めた。この研究所は、ワイマール共和国において、ドイツの中心的教育情報研究所に発展した。1928年から32年まで、彼はハレ・ヴィッテンベルク大学の総長も務めた。ナチスが権力を掌握した後、彼は解任され、1933年の秋から34年の春まで、考古学的研究のためギリシアに滞在した。しかし、中央研究所の所長は1938年まで引き受けられ、続けられた。

注4) フランツ・ヒルカー (Franz Hilker) は、1881年4月22日、教師ヨゼフ・ヒルカー (Joseph Hilker) とその妻アントニア (Antonia) の息子としてボッセボーンに生まれた。彼は、ドイツ語・ドイツ文学研究、ロマンス語・文学研究、英語・英文学研究を大学で

学んだ。1911年彼はギムナジウムの教師になり、1923年まで、芸術教師としてベルリンのシェーネベルクのヴェルナー・ジューメンス実科ギムナジウムで教鞭を執った。1919年、彼は、「確乎とした学校改革者の連盟」を創設し、パラートのもとに1915年に創設されていた「教育と授業のための中央研究所」と提携を結んだ。1920年代の早い時期より、彼はドイツの改革教育者の先端に位置づけられ、学校改革の研究の記録を残した。1923年に、彼はチューリンゲンで高等学校官になり、1925年には、「教育と授業のための中央研究所」に招聘され、そこで1930年から1933年まで事務総長を務めた。彼は、中央研究所所長であり枢密院上級参事官でもあるパラートとともに、芸術教育の全領域にわたる仕事を手がけた。パラートは、より上級の行政官としての役割を果たし、関連する法律や政令の所管を通して、芸術教育に大きな影響を与えた。ヒルカーは、1932年に、「国際連盟の精神的分野の共同研究のための委員会」のメンバーになったが、1933年にはすべての官職を解かれた。1945年に、彼は、フルダ郡の学校再建を委任され、1947年から49年までは、ヘッセン州の教育省で上級行政官を努めた。1947年に、彼は、教育文献情報センターとして、教育研究所を設立して、それを率いた。それは、1954年から、文化大臣会議によって資金が援助され、1957年には、ヒルカー所長のもとにボンに移された。1948年に、ヒルカーは、専門雑誌『陶冶と教育』を創刊し、生涯その編集の役を務めた。1962年に、彼は比較教育学のための基礎的な研究を公にし、さまざまな教育システムを、定量的、規範的な視点で比較する方法を発展させた。このように、外国の教育システムを研究することによって、彼は、ドイツの教育改革に勢いを得ようとした。ヒルカーは、学校教育から比較教育学まで、体操から教育学的記録まで、教育の広い分野にわたって実践的に活躍した。

注5) Hilker, F. (1926) *Turnen und Gymnastik. Leibesübungen* 21:pp.489-490.